京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

1. 研究課題
環境問題の社会史的研究
Studies on the Social History of Environmental Problems

2. 研究代表者氏名
岩城　卓二
Iwaki Takuji

3. 研究期間
2020 年 4 月-2023 年 3 月

4. 研究目的
日本の近世は、生産・生活の場の拡大と、天然資源の獲得のために山野河海を切り開く大開発の時代であった。開発による諸産業の勃興は経済的発展をもたらしたが、他方でそれらに起因する環境問題が発生し、社会問題化していたことは、各地に残される近世史料から知られる。しかし、その多くは一地域内の問題に止まり、環境問題が人の健康や生活環境に関わる公害として大きな社会問題となるのは 1950 年代以降のこととされる。近世以降、人々は環境問題に対してどう向き合ってきたのか。そこで本研究班では、日本の近世から現代までの環境問題について、とくに環境問題に対する民衆運動・社会運動に注目し、運動が起こった現場の社会構造をふまえて環境問題を考えていきたい。あわせて、世界で発生した環境問題をめぐる民衆・社会運動と比較検討し、被害の現場に生きる住民にとって環境問題とは何かを明らかにしていく。
Early modern Japan was an era of great development but also saw an expansion of production and human living space that resulted in the devastation of nature. Although the rise of various industries brought economic growth, historical sources show that it also caused various environmental problems which are now also recognized as social problems. However, most problems did not spread beyond local communities until the 1950s, when they finally began to be recognized as serious social crises, called kōgai, which critically affected public health and destroyed the living environment. How, then, have people confronted such issues throughout history? This research project will explore various environmental problems from the early modern period through to contemporary times, focusing on the social movements and social structures that framed them. We also plan to compare environmental problems in Japan with those encountered in other countries, aiming to clarify the significance and

meaning of such problems for the people living with disaster.

5. 研究成果の概要

3 年の研究期間内に、研究会 43 回(13:30ー17：00)、シンポジウム 1 回、関係資料の収集等の調査活動を 4 回実施した。研究会は歴史学・文化人類学・環境社会学等の研究者が日本・東南アジア・欧米・アフリカを対象に、人の生きるための営みと環境破壊の関係性について報告し、議論を重ねた。当事者たちが無意識のまま積み重ねていった生きる営みがやがて環境破壊を引き起こして問題化されるケース、反対に環境破壊が可視化されても社会問題とはならないケース、社会問題となることで地域内外に深刻な対立が引き起こされるケースなど、ひとつひとつの環境破壊がもつ固有性を押さえた上で、環境破壊にみられる共通性の解明と、共有できる分析軸を考えていった。環境破壊認識の性差、自然観についても検討したが、環境破壊に対する政治動向に関わる議論、および環境に負荷をかけ続けてきた人の生きる営みを見直すための指針、環境破壊が社会問題化し、表面的には沈静化した後に、関連資料をどう保存し、加害・被害の経験をどう後世に伝えていくのかについての検討が課題として残された。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

人文研アカデミー：公開シンポジウム「山に生きる」(2022/12/10)

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

日本を中心に多数の国・地域を対象とした研究成果は十分にあるが、地域環境破壊に対する政治動向、環境に負荷をかけ続けてきた人の生きる営みを見直すための指針、環境破壊関係資料の保存・公開、加害・被害の経験をどう後世に伝えていくのかといった点の議論が不十分であったため、C 班「生きる営みと環境問題」(研究期間 2023・4・1~2025・3・31)でこれらの課題に取り組んだうえで、研究成果の公表を考えている。